

〈論 文〉

アントニオ・ネグリにおける労働と価値 ——『マルクスを超えるマルクス』から非物質的労働へ——¹⁾

山本泰三* / 北川亘太**

I はじめに

現代の資本主義を分析するための仮説的枠組みである認知資本主義論によれば、資本蓄積において非物質的なもの（知識、ネットワーク、イメージ、組織能力など）の意義が強まっているという点によって現代資本主義の趨勢は特徴づけられる。これは労働の変容、すなわち非物質的労働の問題と密接に関係している。これまで内藤（2014; 2016）などによって、認知資本主義の基本的な構図が示され、また認知資本主義論の観点からさまざまなトピックの考察がおこなわれている（山本2016a）。だが一方で、認知資本主義的な収益のメカニズム、あるいは認知資本主義において価値がいかんして生産され実現されるのかという問題についての理論的な分析にかんしては、まだまだ不十分である。この論点についてはC.ヴェルチェッローネによる「利潤のレント化」という議論（Vercellone 2007）を別途検討しなければならないが、このヴェルチェッローネによる参照も含め、認知資本主義論はアントニオ・ネグリ（Antonio Negri）の仕事に多くを負っている。ネグリは、資本主義の歴史的变化と労働の変容の関係、および価値概念との関係について、独特の分析を深めてきた。認知資本主義における価値の問題に取り組むにあたって、ネグリ（およびマイケル・ハート M. Hardt）による価値および労働についての考察を整理しておくべきであろう。

ネグリの著作は多数あるが、認知資本主義論とも共通する概念的な基礎は『帝国』『マルチチュード』（Hardt and Negri 2000; 2004）などにおいてまとまった形で提示されている。ただし、ネグリ＝ハートのこれらの著作における理論的な掘り下げは必ずしも十分なものではない。また、ネグリのこれまでの研究を振り返るならば、ネグリは現実の資本主義の変化を理解しようと試みるなかで新たな概念をつねに作り出しつつ、かなり一貫した観点にもとづいて議論を展開してきたともいえる。ゆえに本稿の課題にとっては、少し遡って『マルクスを超えるマルクス』（Negri 1979）とそれ以降のネグリの主張を追跡することが必要となる。とりわけ、Negri（1979）とHardt and Negri（2000）の間の時期に発表されている「価値－労働」（Negri 1992）および「マルクスについての20のテーゼ」（Negri 1996）は興味深い。そして非物質的労働の概念が導入されるのは、

* 大阪産業大学経済学部教授

** 関西大学経済学部准教授

1) 本稿は、経済理論学会第63回大会（一橋大学，2015年11月）および進化経済学会第20回大会（東京大学，2016年3月）における報告「A. ネグリにおける価値と労働」を加筆修正したものである。Negri（1992）の訳出において黒澤悠氏（大阪市立大学都市研究プラザ）の多大な協力を得た。また、発表に際しては塚本隆夫氏（日本大学）ほかの皆様から貴重なコメントをいただいた。記して深く感謝したい。

『ディオニュソスの労働』(Hardt and Negri 1994)においてである(「マルクスについての20のテーゼ」は『ディオニュソスの労働』より前に発表されている²⁾)。本稿では、これらの著作の読解を試み、ネグリにおける価値論がいかなるものなのかを検討する。

以下の行論のために、Negri (1979) や Hardt and Negri (2000) などから読み取ることのできる、資本主義の変容についてのネグリの議論における基本的観点をまとめておく。第一に、労働者の主体性である。生産はつねに労働を必要とする。しかし労働者は資本とは異なる別の主体であるがゆえに、蓄積の過程にはつねに危機が潜在する。一言でいえば資本とは敵対的關係なのであり、資本主義のダイナミズムはそこにもとづいている。第二に、包摂の問題である。マルクスは、労働過程の資本への統合のタイプとして形式的包摂と実質的包摂の区別を立てた。ネグリはこの包摂の段階的深化を、生産の場面だけでなく、社会の、そして生の全体に資本の支配が及ぶに至る過程にまで広げて捉えている。実質的包摂の絶え間ない進行こそが、資本主義の変容を根本的に特徴づける。資本は生産の領域ばかりでなく流通過程の全域に浸透し、また流通自体を外延的にも内包的にも拡張することで、社会化した資本となる。そのことが、労働者を社会化した労働者に変える。これは闘争の領野の拡張をも意味する。そして第三に、価値法則の問題である。実質的包摂の進行は、労働過程を生産過程の付属物にしてしまう。ここにおいて、商品の価値は労働時間に対応しなくなる。古典的な例としてはオートメーションであり、認知資本主義においては非物質的労働の全面化である。これらの生産の移行が、新たな主権の形態を要請する。

ネグリの方法は、全体へ目配りしてバランスの取れた描写をおこなうといったものではなく、「傾向」を取り出し、その含意を突き詰めようとする³⁾。いきおいそれは抽象的な議論になる。それはある種の思考実験のようなものになる。かつ、その「傾向」の把握は、ネグリにとっては、政治的実践の展望と直接的に関係づけられている。ゆえにネグリの分析における著しい偏りを指摘することは容易である。だが、むしろその偏り、極端さがすでに了解されているなら、そこに示唆を見出すことが可能であるように思われる。

2) 「マルクスについての20のテーゼ」(Negri 1996)の初出は1992年である。“Twenty Theses on Marx: Interpretation of the Class Situation Today,” *Polygraph*, No. 5, pp. 136-70, 1992. および “Interpretation of the Class Situation Today: Methodological Aspects,” in W. Bonefeld *et al.* eds., *Open Marxism*, Vol. 2, London, Pluto Press, pp. 69-105, 1992.

3) ネグリの思想については市田(2014)を参照。ネグリの価値論は特異なものにみえるかもしれない。おそらくそれは彼の方法論に由来している。ネグリにおいて理論的概念は歴史的に、歴史の中で変化していく。それは歴史を概念の自己展開として捉えるということではなく、むしろ概念は歴史的現実の一部として歴史に巻き込まれており、現実の変化とぶつかる中で変化していくものとしてとらえられている。すなわち概念は歴史と切り離された次元で定義されるものではなく、また「歴史」と「論理」が平行しているということでもない。Negri (1979) はマルクスの『経済学批判要綱』を検討した著作であるが、読者にとって、そこでは『要綱』を論じることを通じてネグリ本人の思考が彫塑されているとみなすほうが理解しやすい。Negri (1979) において『要綱』の方法として述べられていること(抽象、傾向、実践における真理、研究・理論の不意を打つ基準、主体の転位)は、ネグリ自身の方法と考えてもよいだろう。しかしながら本稿ではネグリの方法論についての詳論は割愛する。

II 二つの価値法則

「価値－労働」(Negri 1992) は、価値論に関するネグリの見解を要約的に示している。そこでは、二つの価値論が提示されている。すなわち抽象的労働の価値論と、労働力の価値法則である。

前者は、古典派以来の政治経済学においてはよく知られているオーソドックスな理論である。労働は、あらゆる生産活動、すべての商品に共通の実体とされる。ここで問題となっているのは抽象的な労働であり、多様な具体的労働ではない。この抽象的労働の量が価値の大きさを決定する。その単位が単純労働である。ネグリはスウィージー (P. Sweezy) の名を挙げつつ (ただし文献は示されていない)、以下のように述べる。「価値の大きさが表現するのは、ある種の商品と、その商品の生産に必要とされる、社会的労働時間全体の一部との間に存在する紐帯である」(Negri 1992)。この価値論の主張を敷衍するならば、以下になるだろう。分業と交換のネットワークとしての経済システムにおける諸商品の価値は、個々の部門での再生産を可能にし、全体としてのシステムの再生産を可能にする水準でなければならず、その水準は商品生産に社会的に必要な労働時間に従う。それは「異なった生産部門間の労働力の割当を調整する諸法則」である。それは市場の変動の重心である。「近代の表現を使うとすれば、価値法則とはすなわち本質的に一般均衡理論」(Negri 1992) である。もちろん、市場メカニズムによる調整を、瞬時の、あるいはスムーズな調整とみなす必要はない。むしろ市場のカオスは商品経済の秩序の、いかにすれば客観的な経済合理性の、暴力的な貫徹とみなされるだろう。

ネグリにとって、この「均衡」論、第一の価値論の中立的な外観は、資本主義を根底において特徴づけている敵対的關係を覆い隠すものである。抽象的労働の価値論に対置される労働力の価値法則こそが、「敵対」を際立たせる第二の価値論である。「労働力の価値法則は、システムの動的な断絶を主題にして、労働価値を、均衡の形式としてではなく、敵対的關係の形式として考察することで構成される」(Negri 1992)。これは、端的に言えば賃金論であり、Negri (1979) において前面に押し出されている剰余価値論と連関している。

あらゆるマルクスの著作において、[...] 労働力という概念は、価値法則のはたらきからは相対的に独立した仕方で、生産における価値創造の要素として考察される。これが意味するのは、価値の単位が、はじめに「必要労働」との関係において特定されるということである。必要労働は不変の量ではなく、システムの動的要素である。それは歴史的資質を有し、労働者階級の闘争によって決定づけられる。したがって、必要労働とは賃金労働をめぐる闘争の産物であり、労働を改善するための努力の産物であり、労働の悲惨さから逃れるための努力の産物である。したがって、第二の観点こそが価値法則を、資本主義システムの均衡法則にするのとは正反対に、このシステムの構成的不均衡の原動力にするのである。この観点から、われわれは価値法則を剰余価値法則の一部として考察しなければならないし、均衡の構成的危機の引き金となる要素として考察しなければならない。(Negri 1992)

「価値法則を剰余価値法則の一部として考察しなければならない」とは一体どういうことか。ここで私たちは『マルクスを超えるマルクス』(Negri 1979) を参照すべきである。ネグリは『要綱』における「最大の交換は、諸商品の交換ではなく、労働と諸商品の交換である」という一文を引

き⁴⁾、「ここには裂け目がある！ 最初の巨大な跳躍、最初の政治的補説が展開されている。／単純な点から始めよう。貨幣あるいは価値形態という不均等関係は、語義上は所有関係を表わすが、実質的には権力関係を表象している」と述べる (Negri 1979, 邦訳 81 ページ)。ネグリによれば「貨幣と価値」という主題は、『要綱』における範例的な位置を占めている。『要綱』においては、議論は貨幣からただちに価値へ向かう。そこでは価値が貨幣形態において提示されている（「即自的」アプローチ⁵⁾）。ネグリにとっては、まず貨幣の指令という権力があり、資本の支配のもとで生産が行われる。この論点は、貨幣と商品の交換の非対称性を補助線として説明できると思われる。すなわち交換において貨幣と商品は相互に対等な関係ではなく、貨幣から見れば「買う」、商品から見れば「売る」、という非対称な関係である。この交換における商品を労働力に置き換えてみれば、ネグリのいう貨幣の「指令」としての権力という把握を理解することができるだろう。そして、「労働は、交換という形態、貨幣という形態をとる場合にのみ資本へと転化する」(Negri 1979, 邦訳 143 ページ)。このような資本と労働の交換関係のもとで初めて価値は量化されるのであって、剰余価値、いやそもそも搾取関係抜きに価値論は可能ではない。ネグリにとって抽象的労働は、いわば交換関係に捕らえられ取り込まれた労働なのであって、労働のそもそもの属性とはみなされていないということがここから窺われる。「価値はまさに搾取のために指令され、編成された交換である」(Negri 1979, 邦訳 67 ページ)。価値論は、剰余価値論に先立つものではない、ということになる。

その労働力の価値が、必要労働であり、賃金であった。賃金の運動法則が商品の一般的運動法則から相対的に独立している、という点に Negri (1979; 1992) は最大限のアクセントを置いている。「仔細にみれば、必要労働の定義自体がすでに社会的次元の定義なのである」(Negri 1979, 邦訳 77 ページ)。賃金は、労働者の自律的な欲求の拡大によって押し上げられる傾向をもつ。資本主義の発展とともに新しい欲望が創造され、資本はそれをみたすことを要求される。賃金のその自律的運動は、小流通についての議論が明らかにする (Negri 1979 第七講義)。小流通とは、労働者が支払われた賃金と消費財を交換する過程であり、価値増殖過程である資本の流通（大流通）とは区別される。それは、必要労働の価値、労働者自身を再生産する過程であり、資本の生産過程と「並行して」(マルクス)「独立して」(ネグリ)循環する。これが、資本の増殖に抵抗する自己価値創出である。

市場メカニズムに服さない要因が資本主義のダイナミズムをもたらし、価値の体系にインパクトを与える、という分析は、ラディカルな制度経済学の視角と親近的であるように思われる。この点については後ほどふれる。

Ⅲ 価値法則の内破、搾取の新たな形態

ネグリの論究は、二つの価値論を並列して提示するにとどまることなく、さらに進んでいく。そ

4) 『マルクス資本論草稿集 一八五七-一八五八年の経済学草稿 I』(資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店、1981年)、134 ページ。

5) 「貨幣形態のもとで価値法則は、最初から、(1) 恐慌〔危機〕の中で、(2) 敵対的な仕方、(3) 社会的次元において提示されている」(Negri 1979, 邦訳 70 ページ、[] は邦訳書の訳者注)。ネグリはこのような見方を提示することによって、政治を生産過程の外部に追いやる経済学に向って対立する立場をとっている。

これは、ネグリによる現代資本主義の理論的認識をいっそう際立たせる主張を導くことになる。

私がここで表明したいテーゼとは、階級編成の発展において、ポスト工業期まで資本主義が成熟するまでの全期間を通して、第一の形態の価値法則は尽き果てて、第二の形態の価値法則と再び合流する、というテーゼである。しかし、そしてこれこそ本質的なことであるが、まさにこの合流のただ中で、その価値法則は、最終的にはその定義の構造と弁証法的事実を超越して、根本的に刷新されるのである。(Negri 1992)

この文言は何を意味しているのか。第一の価値法則の消尽に関しては、まず、単純労働と熟練ないし複雑労働の区分、生産的労働と非生産的労働の区分、そして知的・科学的労働というものの性格、これらの協働との関係が、資本主義の発展によって現実のアポリアとなる、とされる。このため、単純労働を単位とする価値の尺度は機能できなくなっていく。この説明だけでは、ネグリのいう価値法則の消滅を理解することはやや難しいかもしれない。とはいえここで、この異質な諸労働の区分の転覆、労働概念の「転位 dislocation」(Negri 1996)が、第5節で後述する資本主義的生産システムの移行にともなって起こる、という点は銘記しておかなければならない。

ネグリは、「二つの〔価値〕法則の形態が収斂するという観点から、価値法則の消滅を違った仕方でも考察することができる」という。

第二の法則の形式において、労働力の使用価値は、資本主義発展の動態の決定因として考察された。これが意味するのは、労働力の変動が相対的に独立していることを通じて、労働力全体は、搾取の絶えざる再編成、生産性のよりいっそうの強化、資本による支配の全地球的拡張を資本に対して強いるということである。第一の過程（内包的統合）は、生産構造の有機的構成がますます高いレベルへ向かう（絶対的剰余価値の抽出から相対的剰余価値の抽出へ、産業資本から金融資本へ、等々）という資本主義の進化によって特徴づけられる。第二の過程（支配の全体的拡張）は、資本主義の発展、すなわち、資本による労働の形式的包摂から、社会の実質的包摂への発展によって特徴づけられる。したがって、価値法則の第二の形式は、労働力の使用価値と資本による包摂強化の過程によって支配される、資本の自然史を生み出す。これこそ悪い弁証法 *mauvaise dialectique* である。この弁証法は、資本が使用価値を（内包的および外延的に）完全に統合するまで、比較的独立している労働を資本主義的発展の中核にすえる。それゆえ、労働力の使用価値を変化させるこの悪い弁証法こそ、交換価値の普遍的拡張のかなめである。しかし、ひとたび労働力の使用価値のあらゆる外生的次元が交換価値に還元されたならば、価値法則は、一体どうやって存在し続け、何らかの妥当性をどうやって保持するのだろうか。(Negri 1992)

この最後の疑問文は、反語であろう。否、使用価値は交換価値に還元されえない——それがネグリの主張だと考えるべきである。第二の価値法則、労働者の欲望が発展し、賃金が押し上げられるという自律的運動は、資本がそれに対抗して労働の支配を強化し、その支配の領域を拡張していくという「悪い弁証法」を引き起こす。これは、Negri (1979) において重点的に論じられていた資本の社会化であり、実質的包摂である。資本は工場以外の領域、すなわち、流通の領域から生活、

社会の領域をすべて包摂していく。資本は「社会的資本」へと跳躍する。これは「資本のカテゴリーに浸透する質的な跳躍」(Negri 1979, 邦訳 221 ページ)であり、社会は「資本の社会」となる。歴史的には、マニュファクチュアから大工業、さらに「工場=社会」(そして認知資本主義)への移行である。「流通は社会的条件全体の領有を伴い、それを価値増殖に投下する」(同上書 218 ページ)。「剰余価値および搾取の社会化」(同上書 74 ページ)。これは、生産を内部に統合した流通、ひいては社会の全体から剰余価値が引き出されるということを含意しているとみてよいと思われる。とはいえ、『マルクスを超えるマルクス』の時点で「流通」における価値の生産が明瞭な私たちで検討されているとは言い難いのだが。

資本は、さまざまな質を交換価値に還元していこうとする。ところが逆説的にも、実質的包摂が進めば進むほど、計測できない質が浮き彫りになってくる。包摂されたはずのものの内部から、量に還元できないものが露わになってくるのである。続いて、価値法則の消滅に関する Negri (1992) による最後の説明をみよう。

価値の概念は、はじめは生産性の時間的尺度として着想された。けれども、どのような形式のもとで、時間が、社会的労働生産性の尺度とならざるを得なかったのだろうか。社会的労働が生活の全時間を包含しており、社会のあらゆるセクターに注がれているとするならば、いかにして時間は、それ自身関係しているところの全体性を測定できるのだろうか。実際、私たちは、同義反復の前に自己を見出す。時間が労働過程の異なった質(協働的、知的、科学的)を計測する能力がないことを示した後で、価値法則が明らかにするのは、生活の全体性(あるいはまた、生産と再生産の諸関係)の間に区別を設けることができないということであり、そして時間の全体性も、生活の全体性に織り込まれているということである。生活の時間がすべて生産の時間となる場合、一体どういったものが何を測定するのか。第二の形式の価値法則の発展は、生産的な社会を、資本の中に実質的に包摂するよう導く。搾取がこうした次元に達した時、その測定は不可能とならざるを得ない。それゆえ、まさしく価値法則の第一の形と第二の形が同時に消滅するのである。(Negri 1992)

「悪い弁証法」の帰結は、質が量に還元された状態ではなく、価値法則の根幹をなす「客観的尺度」の危機という事態である(Negri 1996)。歴史のなかで展開される弁証法を通じて、価値法則の根幹をなす諸概念、概念間の区別が曖昧になってゆき、しまいには価値尺度自体の有用性が失われるのである。Negri (1992) は、この事態をこう表現した。「弁証法としての価値法則(尺度の法則)は、それゆえ最終的に内部爆発する」(Negri 1992)。

では、「第一の形式の価値法則は行き果てて、第二の形式の価値法則と再び結合する」という極限的状况において、価値法則が根本的な刷新へと至るとはどういうことなのか。この問いの答えを得るために、価値法則が消尽したときにどういった「搾取」がなされるのかを明らかにするという迂回路を歩みたい。

価値法則が消滅したといえども、「消滅したのは、単に価値法則の弁証法的形態だけである。いふなれば、消滅するのは、単純な量的諸要素の均衡という形態であり、過程の尺度という形態であり、発展の構成という形態である」(Negri 1992)。だから、「価値法則は、剰余価値法則として、したがって、法的規範と政治的法則として、資本主義的包摂の中で社会に対する指揮権および/また

は統制として残り続ける」。ここでいう剰余価値法則とは、搾取論のことでもある。ネグリはこう続ける。

それゆえ、搾取は、すべての経済的尺度の外に追い出される。搾取の経済的現実、もっぱら政治的な関係において固定される。搾取は、資本家の指揮権を維持し、かつ、再生産するという目的をもつ社会的再生産過程として機能している。尺度の概念は老朽化し、消えてなくなる。資本主義システムの再生産は、社会とそのさまざまな部分の規律化および／または制御の過程に応じて秩序づけられる。かくして、実質的包摂の社会において、労働力と労働日の物質的構成は、力の組織化、政治的観点、政治的構成からのみ理解され、方向づけられる。資本は「…」政治的形態でのみ、実質的包摂の社会に対して権力を行使する。資本が生産に対して指揮権を行使する際の方法は、まさしくコミュニケーションに対して指揮権を行使するという方法なのである。(Negri 1992)

客観的尺度が消失した社会経済において、経済的論理だけに依拠した旧来の剰余価値法則は成立しえない。だから今日、搾取は「政治的強奪」というかたちをとらざるをえないのであり、資本家の利潤はまさしく「レント」に近いものになってくる。この権力とは、どこから価値を強奪する権力なのであろうか。「マルクスについての20のテーゼ」(Negri 1996)によれば、それは、「社会的協働」の自律性、「コミュニケーション」、労働の「創造性」からである。

かつて資本によって生産されていた生産的な社会的協働は、今やその諸政策のすべてにおいて前提されており、よりの確に言う、生産的な社会的協働が資本の存在の条件となっている。「…」社会化された労働者は、生産者である——いかなる商品にも先立つ、社会的協働それ自体の生産者なのである。

「…資本構成の高度化は」社会的なものへと反転される。その目的は、社会的なものを統制することである。(Negri 1996, pp. 165-166)

知的かつ科学的な諸力は徐々に生産の中心になっていった。それらの力は、それでもなお、労働の力なのである。増大する非物質性は、労働の創造的機能を排除しないどころか、むしろ、労働の抽象化とその生産性において、その創造的機能を称揚するのである。(Negri 1996, p. 152)

以上をまとめると、経済合理性にもとづく価値法則がたんなる形式と化し、だからこそ、社会的な水準・領域において発揮される労働者の創造性を政治的な指令によって収奪するという新たな価値法則がその形骸化された価値法則に取って代わる、取って代わらざるをえないのである。これが「価値法則の根本的な刷新」が意味することである。

IV 労働と価値、価値と労働

時間によって労働を測定することができなくなる、生の時間と生産の時間が区別されなくな

ること、コミュニケーションが生きた労働の創造性となること。これらは『ディオニュソスの労働』(Hardt and Negri 1994)以降、あの非物質的労働——狭義の経済領域・生産過程に収まらない生きた労働——の属性として述べられている事柄である⁶⁾。ここまで述べたような「資本の社会化」あるいは「工場＝社会」への移行は、同時に労働の変容を意味する。実質的包摂は労働者の主体性の発展が強いたものであるとするネグリの立場からすれば、むしろ労働をめぐる問題にこそ重点を置くべきだということになろう。資本の社会化は、「労働諸過程は工場の壁の外へと移動して社会全体を包み込むにいたった」ということ、「私たちの諸社会における労働は、歴史的に見てもっとも広い範囲で非物質的労働——知的、情動的、そして技術-科学的な労働、サイボーグの労働——へと向かっている」(Hardt and Negri 1994, 邦訳25-26ページ)ということの意味する。ネグリは「価値量の非可測性は、労働が社会のあらゆる構成の基礎であるという事実を否定しない」(Negri 1996, p. 152)と述べ、「労働の創造的機能」が価値を生み出すとみている。労働の創造性、すなわち彼のいう「生きた労働」だけが、今や価値の次元に相当しているという。

非物質的労働の概念は、これまでのネグリの主張の延長線上にあるといえる。にもかかわらず、すべての議論がそのまま反復されているわけではない。上で引用した箇所少し前でHardt and Negri (1994)は、Negri (1992)における文言とはほぼ同様の表現を用いながら、マルクスは「価値についての労働理論」を二つの視点から理解した、と述べる。「第一の理論」＝「抽象的労働の理論」と、「第二の理論」＝「自己価値創出」。そのうえで、第一の理論は完全に破産してしまったと書いているのだが、この破産はネグリらによれば、「労働概念を周縁化するどころか、その中心性をよりいっそう強化されたかたちで再提示している」。それは、「工業労働者階級が社会におけるその中心的な位置を喪失し」、「労働の性質や条件が大幅に変更され」、「労働とみなされてきたものが大きく変化した」ことによる(Hardt and Negri 1994, 邦訳26ページ)。つまり、Hardt and Negri (1994)において、第一の価値法則(抽象的労働)が「ばらばらに粉碎される」と述べることは、労働の変容を強調することと不可分である。またそれはある意味でネグリにとって、労働の解放でもあった。そしてこの主張は、価値の問題が消え失せる、あるいは「内部爆発」と言い放って終わるのではなく、労働概念の変容と価値概念の変容、そして両者の相互的な運動という、より興味深い論点をもたらす。

第一の理論では価値が資本の諸構造の内部に固定されていた。だが第二の理論では労働と価値はともに可変的な諸要素なのである。

それゆえ労働と価値との関係は一方的ではない。[...]労働が価値の基礎であるとするれば、価値もまた同様に労働の基礎なのである。労働あるいは価値創造的な実践と見なされているものは、社会的で歴史的な所与の文脈に存在する諸価値につねに依拠している。[...]労働を構成する諸実践の規定は所与でもなければ固定したものでもなく、むしろ歴史のかつ社会的に規定され、またこの意味でこうした規定それ自体が社会的異議申し立てが闘われる移動的な現場を構成する。たとえばフェミニストによる研究や実践[...]。この意味で、価値についての労

6) 非物質的労働についての詳しい検討はLazzarato (1996)によってなされ、マラッツィのポスト・フォードイズム論(Marazzi 1999)とともに『帝国』(Hardt and Negri 2000)における労働論の重要な源泉となっている。非物質的労働の概念については宇仁(2003)、山本(2016b)も参照。

働理論は、労働についての価値理論でもある。(Hardt and Negri 1994, 邦訳 24-25 ページ)

経済学における価値の理論は、価値という概念をその多義的な社会性から切り離し、財の交換比率の問題に純化することで成立しえた。それと相即して、労働とはすなわち賃金労働であり工場労働であった。ところが資本が社会化し、価値増殖過程および労働過程が「工場の鉄柵」を越えて拡大していくならば、価値の多義性が回帰することになり、したがって従来の経済的な価値概念は動揺し、諸価値のコンフリクトが引き起こされざるをえないだろう。それは、何が労働なのかをめぐる折衝、人間諸活動の序列の問い直しなのである。それゆえに、現代の認知資本主義における価値の問題を分析するためには、たんに量的で一元的かつ形式的な価値論では不十分になってくる。ネグリらの議論は、このことを強力に主張するものである。

とはいえ、価値論においてネグリらがなし得たことはそこまでだったと考えることもできるかもしれない。いまや価値の古典的な、一元的な尺度を素朴に信じることはためられる。だが資本主義においては、量的な形式に還元された価値として表現される利益が追い求められ、かつ蓄積がなされるほかはない。ここにおいてこそ理論的・実践的な問題が現れているのではないだろうか。

V 資本主義の構造的変化と労働者の形象

ここまで、ネグリの価値論について概念のレベルで検討してきた。しかしすでに述べたように、ネグリが示す価値法則の転回は、概念の自己展開ではなく、現実の資本主義の構造的変化——それは敵対的關係によって駆動される政治的ダイナミズムでもある——によって引き起こされるものとして論じられている。Negri (1996; 2003) における資本主義の発展に関する理解は、おおむねレギュレーション理論に依拠していると言ってよいのだが⁷⁾、資本主義の歴史的発展が価値論を担っている概念の危機をもたらすというこの視角に、ネグリの特異性が現れている。

Negri (1996; 2003) は資本主義の歴史を、産業革命に始まる「マニュファクチュア」の時代、第二の産業革命として 1848 年前後から始まる「大工業」の時代、第三の産業革命として 1960 年代末以降のポスト・フォードイズムの時代⁸⁾ に区分した。さらに、長大な大工業期は、第一局面と第二局面に分けられる。ここで大変興味深いことに、「マルクスについての 20 のテーゼ」では「マルクスの価値論は、産業革命という起源に縛りつけられている」と述べられているのである (Negri 1996 テーゼ 5)。ネグリは、マルクスの関心が大工業の時代に向けられていたにもかかわらず、リカードが定式化しマルクスが発展させた価値論は、「実際にはその前、すなわち最初の産業革命の

7) ネグリは、「賃労働関係」、蓄積体制、調整様式に関する理解について、レギュレーション理論に多くを負っている。しかし、両者には以下の二つの違いがみられる。まず、対立についての見方の違いである。レギュレーション理論の根本にある問いは、ある一定期間において対立が抑止されるのはなぜなのかという問いであるのに対して、ネグリは、抑えきれない敵対的關係、そして蓄積体制と調整様式からなる発展様式が機能不全に陥るときに明るみに出てくる危機を捉えることに関心を集中している。次に、理論に与えられている搾取の位置である。レギュレーション理論は、マルクスの概念体系の多くを継承しながらも、搾取を論じることを忌避した。その一方でネグリは、本稿で確認する通り、搾取を自らの価値論の前面に押し出している。

8) 大工業に続く時代に対して、Negri (1996, p. 156) は「第三の産業革命」や「『社会的労働者』の時代」という語句を充てるにとどまっていたが、Negri (2003) はより踏み込んで「認知資本主義」という語句を充てた。

時期である「マニファクチュア」期において形作られた」と捉える。それが、客観的尺度への還元としての価値論の「限られた可塑性の源」だという (Negri 1996, p. 157)。ゆえに、第3節で取り上げた労働の区分の揺らぎは、すでに大工業期の第一局面において徐々に始まっていたことになるわけだ。それは第二局面においていっそう強まり、ポスト・フォーダイズムにおいて労働概念はついに「完全に転位させられる」。そしてこの過程は以下でみるように、労働者の形象の変容としても示される。

表1 ネグリによる資本主義の時代区分 (大工業期以降)

時代区分	大工業		ポスト・フォーダイズム (* 認知資本主義)
	第一の局面	第二の局面	
期間	1870年(パリ・コムューン)から1917年ロシア革命まで	第一次世界大戦末期から1968年革命まで	1970年代から(* 90年代から)
労働過程	専門的労働者	大衆的労働者	社会的労働者
消費規準	形成されつつあるが、未熟	大量生産された財を獲得する期待としての賃金	市場の選択、個人主義
調整様式	金融資本の構築、独占の強化、帝国主義的發展	介入主義国家	多国籍のラインに沿って拡張
プロレタリアートの政治的編成	労働者の党の形成	一方で労働者の党、他方では新たな運動、組織形態	社会的(* ネットワーク的)

Negri (1996; 2003) などをもとに著者作成。

大工業の第一局面は、レギュレーション理論が「外延的蓄積体制」とよぶ期間である⁹⁾。労働過程では、「労働のサイクルについてある一定の認識をしいに可能にする学習過程に深くかかわる」「専門的労働者 professional worker」がこの過程と労働者たちをまとめている (Negri 2003, 邦訳65ページ)。低賃金ゆえの、供給に見合わない有効需要によって、大量生産は制約されている。調整様式としては、国民国家が金融資本の構築、独占の強化、帝国主義的發展と制度的に結びついている。

この時期は、生産過程の統制をめぐる資本と専門的労働者が対立する。労働者の政治的編成については、労働者の党の形成を挙げなければならない。「それは、大衆の社会主義的解放というプロジェクトに準じて(大衆的成分と前衛的成分、無政府主義的成分と政治的成分をもつ)二重の組織、および、工業生産と社会的組織の労働者管理という綱領を基礎としている。[……]労働の諸価値と工場の生産的労働の力量は、根本的なものとして想定される」(Negri 1996, p. 155)。資本は、専門的労働者から技能や生産過程についての知識を剥奪することによってこの対立を克服した。

9) レギュレーション理論のいう「外延的蓄積体制(生産規模の外的拡大であり、生産性の大きな上昇をとまわらない)は絶対的剰余価値の生産(労働時間と労働強度の増大)の論理に対応していて、内包的蓄積体制(生産性と実質賃金の並行的上昇)は相対的剰余価値の生産(技術革新による消費財生産物価値の低下)の論理に対応している」(ボワイエ 1996, 27ページ)。これらはそれぞれ、ネグリのいう大工業の時代の第一局面と第二局面に対応している。ただし、レギュレーション理論における標準的な歴史認識においては、この外延的蓄積体制と内包的蓄積体制の間に「大量消費なき内包的蓄積」の時期が挟まれている。大戦間期のアメリカにおける蓄積がそれに当たる(ボワイエ 1996, 129ページ)。

こうして大工業の第二局面へと移行するのだが、これはレギュレーション理論のいう「フォーディズム」や「内包的成長体制」に当たる。労働者は、テイラー主義にもとづいて再編成される。これが「大衆的労働者 mass worker」である。複雑な労働過程のほんの一部に縛りつけられるなかで、労働者の技能と生産に関する知識は剥奪される。それは、団体交渉における労使の妥協にもとづく継続的な賃金上昇の代償であり、それが大量消費を可能にする消費規準を形成する。この調整様式を支えるために、ケインズ主義的介入国家は、完全雇用の維持と社会扶助の保証に乗り出す。

労働者の政治的編成についてみると、一方で労働者の党、および社会主義的労働者組織が継続しているものの、他方で先進資本主義国においては、制度化された階級関係の外側で、新たな運動が形成されていった点をネグリは重視する。「彼らは、あらゆる形の代表委任を根本的に拒否し、」「労働の拒否」や「賃金の平等」といった優れた概念上の結集点を発展させた」（Negri 1996, p. 156）。ネグリがここに見出しているのは、やはり傾向である。労働者の形象が大きく変容しつつある、その兆しである。

1960年代から70年代、このような文化的・社会的にも広汎に展開した闘争はピークを迎え、こうしたコンフリクトや第三世界の解放闘争が、資本に対して圧力を生み出す。ニクソン・ショック以降の規制緩和は、この闘争がもたらす圧力を打破する試みである。資本は工場を再編、「破壊」し、生産組織は空間的に分散化されていく。「その代わりに、社会的知識の収奪に、社会的労働ネットワークの資本化に、焦点が当てられる。要するに資本は、工場の境界を超えて拡張する労働者の搾取に集中するのである。私たちは、この人びとを社会的労働者 social worker と呼ぶ」（Negri 1996, p. 163）。この時期、社会がコンピュータ化するなかで、資本による搾取の対象は、社会の外側から社会そのものの内側へ、つまり工場からコミュニケーションへと変化する。消費規準は、画一化された商品の需要から市場における多数の商品からの選択へと拡散していく。調整様式は、多国籍の生産ラインに沿って拡張され、くわえて、世界経済の調整において金融が果たす役割が増大する。この、やがて認知資本主義へと至る流れにおいて、「プロレタリアートの編成は社会的になっている。それは、プロレタリアートが住まう領域でもある。プロレタリアートは、労働の内容から見ると完全に抽象的、非物質的、知的であり、労働の形態から見ると可動的で多形態的である」（Negri 1996, p. 156）。すなわち、彼らは、自らの能力を社会という次元で回復させたのである。

[...] 私たちは新しい時代の始まりにいたのであり、もはや単に、労働の抽象化過程が完了した局面にいたるのではない。このことは何を意味するのか。[...] 大工業時代の二つの時期において、労働の抽象化の進展と生産諸力の社会的協働の過程の編成が、産業的かつ政治的な資本主義的機械の発展の帰結であった。しかし、いまや協働は資本主義的機械に先立ってもたらされるのであり、産業から独立した条件としてもたらされるのである。マニュファクチュアと大工業の後の、専門的労働者と大衆化された労働者の時期の後の、生産の資本主義的様式の第3の時代は、資本に対して大衆の真の自律性を、集团的自己価値創出の真の能力を立証する、「社会的労働者」の時代として表される¹⁰⁾。(Negri 1996, p. 156)

10) 「これは第三の産業革命であるのか、あるいは、共産主義への移行の時なのか」とネグリは続ける。現代の資本主義は極めて両義的なものとして理解されていることが、ここに如実に表現されているといえよう。

本稿で理解しようと努めてきたネグリの価値論——価値法則の消尽と刷新——は、以上のような歴史的・政治的認識と不可分である。

Ⅵ 補論 ネグリとコモンズ

ネグリのこのような分析は、それ自体として孤立させて取り扱うよりも、別の文脈の議論と突き合わせることによってその可能性を活かすことができるように思われる。ネグリは資本主義の歴史的把握においてたんに制度変化を強調しているのではなく、「価値」、すなわち経済の概念的基底のレベルにおける、社会的・政治的ダイナミクスの重要性を見出している。わたしたちがここで想起するのは、進化論的経済学の創始者の一人であり泰斗でもある J. R. コモンズである (Commons 1934)。近年レギュラシオン派の周辺で再発見され急速に研究が進んでいるこの経済学者は、経済学の歴史を紐解いて独自の解釈を加えながら、「適正な価値」という独自の価値概念を構築しようとした。彼は、制度を経済システムの外被あるいは付加物としてみなすことなく、歴史的に進化してきた制度の総体として経済システムを捉える見方を提示した。このような見方は、一部のレギュラシオン派などにとっては当然の前提となっているが、現代においてもなおコモンズが独創的であると評価されるべきは、彼が以下の二点を喝破したことであろう。まず、政治制度、経済制度、文化制度が絡まり合うシステムの中でなされる企業内外の取引の帰結として生じるあらゆる価値が、政治的、経済的、倫理的な規範を不可避免的に縮約している点である。次に、その規範は、統治機構、産業界、学界を問わず、人びとの意志にもとづく無数の営為を通じて練り上げられてきた点である。人びとは、各自の目的を遂行するために、自由、財産、価値といった概念にそれまでにない「意味づけ」を与えたり、新奇なルールを創造していった。その歴史的動態の帰結の一つが、「無形資産」あるいは「無形価値」の認知であり、それを評価する標準化された仕組みを構築するための苦闘であった (北川・井澤 2016)。

コモンズが生きた時代に顕在化してきた無形資産をめぐる問題は、認知資本主義においては国際政治上の重大な争点となるほどまでに発展した。本稿の歴史認識にもとづくと、20世紀初頭のアメリカ資本主義の発展に実務と学問で寄与したコモンズは、実質的包摂が加速し始めた時代に生きていたのである。だからこそ、無形資産をめぐるコモンズの実務上・思想上の苦闘を理解することは、現代の実質的包摂を批判的に分析し政策的オルタナティブを見出す糸口になりうるように思われる。もちろん、ネグリとコモンズのアプローチは対照的といつてよい。にもかかわらず問題関心の交差が見いだされるところが重要なのである。ネグリとコモンズの理論を比較検討すると、ネグリの「過ぎたる点」、コモンズの「時代遅れの点」、そして、私たちが想像力豊かに創り出さなければいけない概念道具や理論装置が見えてくるかもしれない。

Ⅶ 結論

ネグリは、二つの価値論、すなわち抽象的労働の価値論と、労働力の価値法則を対比する。後者は、イタリアの異端的なマルクス解釈によって練り上げられた議論である。労働力の価値法則は労働者の主体性を体現するものであり、それが資本と労働の敵対的関係を賦活することで、資本による社会の実質的包摂を深化させる。資本が生全体の取り込んでしまうことが、かえって価値の客

観的尺度を危機に陥れることになり、搾取は直接に政治的なものと化す。ただしこれは価値という問題自体の消滅なのではなく、現代の資本主義における価値および労働の概念が大きく変容しつつあるということを示す。このような価値の概念・価値法則の転位は、資本主義の構造的変化についての歴史的・政治的認識と一体のものとして描かれている。

以上のような分析は、ある種の極限の展望であると言えよう。現実には、すべての生産が非物質的になることは決してありえず、量的な尺度が完全に消滅するということもありえない。現状分析にとっては、むしろ不均質な諸要素がいかに複合しているのかを解明することが極めて重要である。しかしネグリは、もとより穏当で手堅い結論を出すことに関心はなく、その強烈な政治的問題意識のゆえに、いわば未来への投企として概念を、その転位を提示してきたのだろう。

それは一面で、現代の労働のあり方についての鋭い洞察たりえている。脱工業化した資本主義において、遠景に霞んでいったと考えられていた「搾取」という概念を用いるべき状況は、いまや決して特殊なものではない。そしてこの状況は生産過程において労働者が劣悪な労働条件を強いられるという点のみによって理解されうるものではなく、社会的諸条件の布置の分析を伴わなければならない。たとえば、それは労働をたんなる苦痛とはみなさず、「やりがい」や「人間としての成長」、ようするに労働の自律性がさかんに語られる状況と不可分なのだ。そこかしこに見出されるのは、新たな労働の性質、およびそれが産みだすものについての評価が社会的に混乱しているがゆえに生じる、歪みである。

もちろん、「権力」をただたんに強調するだけで価値の問題が分析できるわけではない。剥き出しの力の行使のみならず、むしろ非物質的なものの規格化・標準化、さまざまな装置の配備、それらによって組み立てられるメカニズムが問われなければならない。労働力についていえば、賃金労働はますます人的資本という枠組みによって統御されていくだろう。そこにもまた政治の過程がはたらいている。

本稿では、ネグリのいくつかの文献に限定してその主張をみてきた。ネグリの価値論を考えるために他の著作についても検討を進め、その射程を問うことが必要である。また、ネグリらの議論は旧来のマルクス派に対する批判からはじまっているのだが、そのことが制約にもなっていることは否めない。本稿でもふれたコモンスやその他の理論的アプローチを検討し認知資本主義の価値論を組み立てていくことが今後の課題となる。

参考文献

- Commons, J. R. (1934) *Institutional Economics: Its Place in Political Economy*, New York, Macmillan. (『制度経済学——政治経済学におけるその位置』上巻は中原隆幸訳、2015年、中巻は宇仁宏幸・坂口明義・高橋真悟・北川亘太訳、2019年、下巻は宇仁宏幸・北川亘太訳、2019年、ナカニシヤ出版)。
- Hardt, M. and Negri, A. (1994) *Labor of Dionysus: A Critique of the State Form*, Minneapolis, University of Minnesota Press. (長原豊ほか訳『ディオニュソスの労働』人文書院、2008年)。
- Hardt, M. and Negri, A. (2000) *Empire*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press. (水嶋一憲ほか訳『帝国——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社、2003年)。
- Hardt, M. and Negri, A. (2004) *Multitude*, London, Penguin Press. (幾島幸子訳『マルチチュード [上] [下]』日本放送出版協会、2005年)。
- Lazzarato, M. (1996) "Immaterial Labour," in P. Virno and M. Hardt eds., *Radical Thought in Italy*, Minneapolis, Minnesota, University of Minnesota Press.

- Marazzi, C. (1999) *Il post dei calzini: La svolta linguistica dell'economia e i suoi effetti sulla politica*, Bollati Boringhieri. (多賀健太郎訳『現代経済の大転換』青土社, 2009)
- Negri, A. (1979) *Marx oltre Marx: Quaderno di lavoro sui Grundrisse*, Milano, Feltrinelli Editore. (清水和巳ほか訳『マルクスを超えるマルクス——「経済学批判綱領」研究』作品社, 2003年)。
- Negri, A. (1992) "Valeur-travail: crise et problèmes de reconstruction dans le postmoderne," *Futur antérieur*, 10, pp. 30-36. (<http://www.multipitudes.net/Valeur-travail-crise-et-problemes/> 2019年9月30日閲覧)。
- Negri, A. (1996) "Twenty Theses on Marx: Interpretation of the Class Situation Today," in S. Makdisi, C. Casarino, and R. E. Karl eds., *Marxism Beyond Marxism*, New York and London, Routledge.
- Negri, A. (2003) *Guide: Cinque lezioni su Impero e dintorni*, Milano, Raffaello Cortina Editore. (小原耕一・吉澤明訳『〈帝国〉をめぐる五つの講義』青土社, 2004年)。
- Vercellone C. (2007) "Crisi della legge del valore e divenire rendita del profitto. Appunti sulla crisi sistemica del capitalismo cognitivo," in A. Fumagalli, S. Mezzadra (a cura), *Crisi dell'economia globale: Mercati finanziari, lotte sociali e nuovi scenari politici*. Verona, Ombre Corte. (「価値法則と利潤のレント化」朝比奈佳尉・長谷川若枝訳『金融危機をめぐる10のテーゼ』以文社, 2010年)。
- 市田良彦 (2014) 『存在論的政治』航思社。
- 宇仁宏幸 (2003) 「ネグリの「非物質的労働」概念について」『現代思想』第31巻第2号, 119-129ページ。
- 北川亘太・井澤龍 (2016) 「アメリカ社会の発展と J. R. コモンズ「適正価値論」の形成」『経済論叢』第190巻第1号, 71-108ページ。
- 内藤敦之 (2014) 「認知資本主義レジームにおける不安定性」経済理論学会第62回大会 (阪南大学) 報告資料。
- 内藤敦之 (2016) 「認知資本主義—マクロレジームとしての特徴と不安定性」山本泰三編『認知資本主義』ナカニシヤ出版, 29-55ページ。
- ボワイエ, R. (1996) 『現代「経済学」批判宣言——制度と歴史の経済学のために』井上泰夫訳, 藤原書店。
- 山本泰三編 (2016a) 『認知資本主義——21世紀のポリティカルエコノミー』ナカニシヤ出版。
- 山本泰三 (2016b) 「労働のゆくえ——非物質的労働の概念をめぐる諸問題」山本泰三編『認知資本主義』ナカニシヤ出版, 57-82ページ。
- 山本泰三・北川亘太 (2016) 「A. ネグリにおける価値と労働」進化経済学会第20回大会 (東京大学) 報告論文。